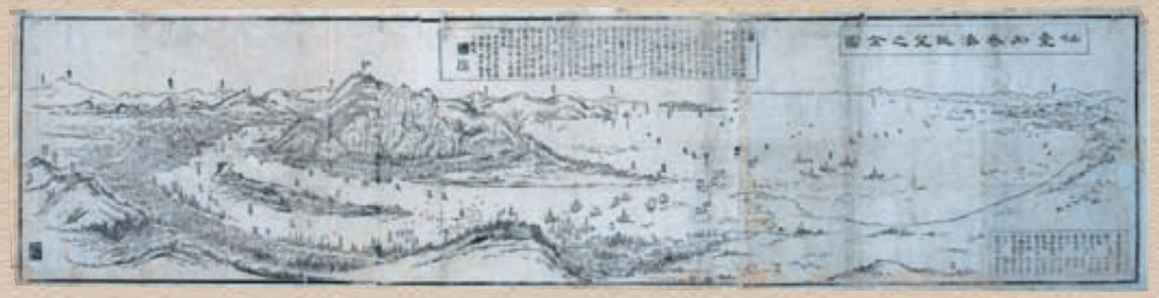
江戸時代の石巻



仙台石巻湊眺望全図

江戸時代の石巻は、港町として繁栄した現在の中心市街地、大規模な新田開発が行われ、豊かな米作地帯であった平野部、漁業が盛んで、遠隔地交易も営んでいた沿岸部の三つの地域で構成され、現在の石巻地域の基礎ができあがりました。

港町石巻と米作地帯の平野部

江戸時代初めの仙台藩領は、広大な水田開発可能地が広がっていました。藩では、北上川の改修を進めるとともに、新田開発を推し進めました。その結果、石巻地域では多くの新田が開発され、豊かな米作地帯ができあがりました。この米は藩の政策として、急速に発展しつつあった江戸に運ばれ、江戸の米の３分の１が、本石米とも呼ばれる仙台米であったといわれています。

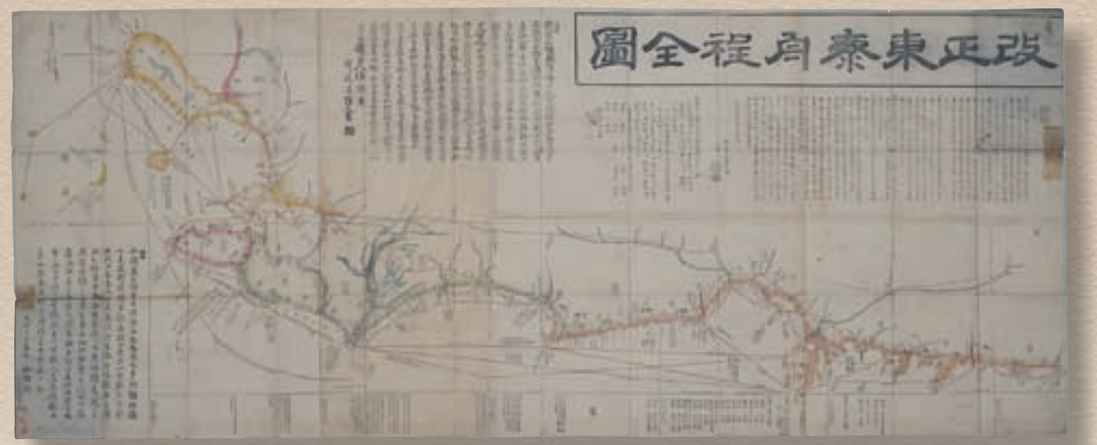
この豊かな米作地帯で生産される米の最大の積出港として整備されたのが石巻でした。

北上川を通じて石巻に集められた米などの物資は、千石船で江戸に運ばれました。石巻港は多くの船で賑わい、松尾芭蕉などは、その繁栄ぶりを書き残しています。

仙台藩御用船絵馬（複製）

仙台藩御用船は、伊達氏の印の一つである九曜ののぼりを掲げていた。船尾に赤九曜ののぼりが描いてある。

仙台藩御用船ののぼり



改正東海舟程全図　鍬崎（岩手県）から田子の浦（静岡県）までの東廻航路が描かれている。

漁業と遠隔地交易の沿岸部

リアス式海岸の入り江が広がる沿岸部は、豊富な漁業資源を持ち、江戸時代以前から沿岸漁業を行っていたと考えられています。江戸時代は紀州漁師の進出などもあって、技術の改良も進みました。また、沿岸部には、田代の平塚家・分浜の青木家などが、千石船を所有し、日本各地との交易を行っていました。

江戸時代後期の定置網を描いた絵図

岬の沖の魚の回遊ルートに設置されていたことがわかります。

大漁カンバン

大漁の際に網元が網子などに配った。網子らは、これを着て練り歩いたという。